



教育学部准教授
余 健

よ けん
修士(文学)
専門分野は、日本語学、社会言語学

この記事に関連した情報は以下のアドレスでもご覧いただけます。
● <http://www.mie-u.ac.jp/links/research/>

右図／熊野の伝統的語彙「タバル」のイメージ



地道な方言調査を通じて 学際的研究の可能性を発見。

社会言語学の研究は多様な学問分野が関わり、学際性に富んでいます。教育学部では熊野地方の方言の調査を行い、語の意味の変化や社会学における世代差を明らかにするとともに、得られた成果を地域の小学生の教育にも活用するなど従来の枠組みを越えた学際的研究の可能性を見出しています。



五感をフルに活用してオジャミ(お手玉)をタバル(取る) 佐古口ふささん(左76歳)と竹ノ花光代さん(右80歳)共に熊野市紀和町出身



ガロポシ(かっぱ)の話を豊かに語る山本文子さん(左75歳)と楠中逸香さん(右69歳)共に熊野市飛鳥町出身

境界分野としての社会言語学の魅力

以前、新聞紙上で目にした利根川進博士(ノーベル生理学・医学賞を受賞)の「研究の境界分野にはゴールドが落ちている」ということばが、私の胸の中に印象深く残っています。

私は、日本語を対象とした社会言語学を専門としていますが、社会言語学の魅力は、その利根川博士のことばに凝縮されているように思われます。社会言語学の研究を行う上で、関わる主な学問分野は次のように挙げられます。

国語学、国語教育学、日本語学、日本語教育学、方言学、英語学、言語学、音声学、



外枠は、敬意の制約の強さを示している。矢印は、上から下への敬意と送り手から受け手への求心的方向性の両者が統合されていることを示す。

強い敬意の制約に基づく上から下への供物の移動(図1)

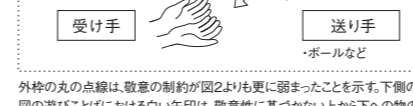


外枠の点線は、敬意の制約が図1の段階より弱まったことを示す。矢印の意味は図1と同じ。

敬意の制約が少し弱まった上から下への供物などの移動(図2)



外枠の丸の点線は、敬意の制約が図2よりも更に弱まったことを示す。下側の図の遊びごとにおける白い矢印は、敬意性に基づかない上から下への物の求心的な移動のみを示している。熊野市の50代以上に多い回答パターン。



敬意の制約が更に弱まった上から下への供物などの移動(図3)



敬意の制約も敬意性もなくなった段階。行事名「タバラシテ」にのみにおける求心的な移動のみ残存。熊野市の10、20代の人に多い段階。

敬意の制約や上から下への敬意性がなくなった段階(図4)



日本版ハロウィーンである「タバラシテ」の行事を行っている様子(場所:熊野市紀和町、2007年9月15日) 写真提供:吉熊新聞



方言調査の結果を生かし国語の授業を鈴木幹夫先生が行っている様子(場所:熊野市立入鹿小学校)

社会学、異文化研究、文化人類学、心理学、認知科学、認知言語学、医学…利根川博士のいう「ゴールド(価値のある新しい発見)」は、もちろん簡単には見つかりませんが、上記の各学問分野領域を基礎として、かつその枠組みを越えて行われる学際的な社会言語学的研究には、「ゴールド」を発見できる可能性が大いに秘められているものと言えるでしょう。ここに正に社会言語学の魅力があるように考えます。以下の話の中では、方言学(熊野地方の伝統的語彙「タバル」の使用)、社会学(世代差)、国語教育学(作文教育)の諸分野が関わってきます。

三重県熊野市をフィールドとして

これまで熊野市内の高年層(80代)から若年層(10代)を対象にした方言の世代差調査や民話の収集を行ってきました。その結果の中で、信仰の地、熊野らしさを最も表現している伝統的語彙「タバル」(いただく)に焦点を当て、社会言語学の魅力を確認してみたいと思います。

8世紀頃の使用例にまで遡れるこの「タバル」は、謙讓語「たまわる」を語源とし、熊野においては、元来「お月見の夜に神様から供物をいただくこと」のみを表す神仏語彙の中でも使用場面が限定された敬意度の高い形式でした(図1)。そこから、神仏用語の意味範囲の中で、「お月見の夜に子どもたちが家々を回って供物をもらい歩く行事名(タバラシテ)」や「普段の神棚や仏壇より供物をいただくこと」などに意味を変化・拡張させつつ、敬意を低減させていきました(図2)。さらには、神仏用語以外の「キャッチボールでボールを受けること」などにも意味を拡張させ、ますます敬意を低減させた段階(図3)も確認できました。ここまでの「タバル」の使い方は、熊野市内の50代以上の人に多く確認されています。

図1から図3までのプロセスは、一般的な敬語形式にも確認される「敬意低減」の法則(敬意を含む語形はその使用場面を広げていくと、それに対応して敬意が低くなっていく法則)に従っているとも言えます。他の例としては「貴様」における尊敬語から卑罵語への変化や「あげる」における謙讓語から美化語への変化の例を挙げられます。そして、現在の熊野の若年層では、完全に敬意を失った上記行事名「タバラシテ」のみを使用しています(図4)。

研究成果の国語教育への援用と地域への還元

この方言調査に基づく「タバル」の意味変化と、それに対応した生活環境の変化の流れが伝わるようなビデオ教材を2編作成し、小学5、6年生を対象に、作文教材と組み合わせ鈴木幹夫先生(熊野市立入鹿小学校)に国語の授業を行っていただきました。その授業では、子どもたちが昔の生活やことばの使い方に接することで、子どもたちの価値観が揺さぶられ、我々も国語教育における作文教材と方言調査に基づくビデオ教材との有機的な組み合わせ方について多くの示唆を得ることができました。

このように方言学的な観点から熊野の「タバル」を取り上げ、また調査・分析の観点として社会学における「世代差」に注目し、その成果を国語教育における作文教育と連携させるという社会言語学的な観点から、ささやかながら私にとっての「ゴールド」が垣間見えた気がします。

今後も華やかな賞とは無縁ではありながらも、これからの生き方に指針を与えてくれ、心を豊かにしてくれるきっかけになるような「ゴールド」を、方言調査を通して探し求め、学生さんや教育現場、また地域の皆さんとその意味を共有し、深めていきたいと考えています。